

## 福島ボランティアツアー2015

期間 2015年6月12～16日

参加者 10名(稲本、竹山、丸山、岡本、武藤、西、前東、藤井、山下、今井)

6月12日苫小牧港発 フェリー泊 船中にてミーティングを行う。

6月13日仙台港着 一路福島を目指す。相馬市塚田地区仮設店舗はまなす商店街「報徳庵」にて昼食し、地元ボランティアの大亀郁美さんより被災復興の話进行を伺う。若い人が郷里の復興を担うのは頼もしい。



国道6号線を南下しいわき市に向かう。南相馬市、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町迄の間に避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域を通り抜けた。帰還困難区域では車は通過するだけで停止は不可。歩行、自転車、バイク等は通行そのものが不可である。下の6枚の写真は国道6号線の走向の車窓からの撮影。



↑ 丘の向こうに第一原発が見える



↑ 出入口はフェンスが張られている

いわき市久之浜町の浜風商店街を訪問。この商店街は小学校の敷地内にある。被災状況を示すコーナーの隣の電気屋さん「プラネットさとう」さん夫妻が語り部として店内で映像を見せながら説明をして頂いた。



6月14日いわき市四倉海岸 ここでは植林ボランティアを行う。作業としては午前中は伐開と草刈り作業で、午後植林をする。何人かはうるしにかぶれたものの、大変有意義であった。植栽を配慮すれば海岸林が非常に有効であることが今回の津波で実証されたことを知った。我々を受け入れてくれたのはNPO 法人いわきの森に親しむ会である。NPO 法人トチギ環境未来基地等近隣の栃木や全国から苗木や植林作業の支援を受け入れている。



この植林は密植が特徴である。植樹して下草に負けない大きさになるまで下草刈りは行うが間伐はしないという。50万本の植樹を計画とのこと、歳月を要する息の長い事業である。

植林後、南相馬市の宿泊地に向け国道6号線を北上する。途中、富岡町のJR駅付近(居住制限区域)を視察する。震災時のまま時間が止まっていた。線路沿いに海岸側におびただしい汚染土が山積みされていた。



↑ 上段写真の右と中の二枚にはJR常磐線が写っている。開通を目指して復旧がすすめられているがここは未だ未だ先のようなのだ。

南相馬市小高区の浦尻地区、女場地区、小高駅を 前年に訪問している地区であり変化を確認する。浦尻地区は仮置き場が拡張され、女場地区は住宅の前に有った汚染土袋が運び出され、小高駅の駐輪場は柵が設けられていた。駅構内線路に繁茂していた雑草は処理され始めていた。

写真:上段は 2014 年、下段は 2015 年の小高区の変化。左:浦尻地区,中:女場地区,右:小高駅駐輪場



6月15日浪江町にある「希望の牧場」訪問。

被災後国が殺処分の指示を出したが、それに疑問を感じ今も約 300 頭の牛を飼っている。牧場の代表・吉澤正巳氏に説明を受ける。この牧場のことは今年 2 月 NHK・e テレで放送された。本来なら食肉としてと殺されている牛を生かし飼い続けるという行為に対して、吉澤氏自身の葛藤が描かれていた。壁面に書かれていることは過激に見えるが、決してそうではないことを確認する。

(web サイト有り)



↑ 先ずは吉澤氏から説明を受ける

↑ 吉澤氏と語らう



↑ 過激な落書きではなく「叫び」です

↑ 傍目には長閑な景色なのです

飯館村。

昨年訪問している箇所を数ヶ所立寄り変化を確認する。汚染土除去作業が大規模に行われていた。



伊達市霊山町。

暮らし茶屋「風知草」にて昼食をとる。ここは若い樋口夫妻が震災前に開店の準備を始めた矢先、原発事故に遭遇した。果敢にも夫妻は昨年秋、自分達で改造し店をオープンさせた。去年訪れた時はその準備の最中であったから、今年は表敬訪問兼ね食事した。頗る美味しかった。(営業日限定で要予約、web サイト有り)



夕方、仙台港到着、着フェリーにて帰路に着く。

16日苫小牧港着 現地解散

雑記 >>

福島を訪れるのは昨年続き二度目である。如何考えても現地の状況を見れば国内の原発推進は言うに及ばず再稼働もすべしとは言えないように私には思える。ただ、関連業務に携わっている人は死活問題と言い、自治体によっては財源の多くを原発に依存している所もある。更には金科玉条のように言われていた電力コストが一番安いというのはもう流石に誰も信じないだろう。死活問題とあたかも理が有るように思えるものの如何なものだろうか？私には何処か変に思える。作って事故が起き拙い危ないと分かったら止めるのが道理で、単純明快な話ではないだろうか。何より忘れてはいけないのは5年経っても未だ10万人以上の方が避難している現実だ。また、事故地域以外の東北や関東にもホットスポットが存在しているのは知られている。更には世界最大の都市・東京から車で数時間の所で起きた事故であることだ。今の原発はトイレがない家のようなもの。トイレが無いのは汲み取った汚物(使用済み燃料)を捨てるが出来ないからだ。兵器としての開発(原爆)がそもそも発端なのだから後始末等は考えてはいない。廃炉技術は作る以上に高度な技術が必要で、事故が有った場合はもっと技術が必要なのは事故のお蔭で良く分かった。少なくとも私達の時代はそれが出来ていないのだ。だからそうした課題解決を若い研究者に委ね託すしかない。技術立国”日本”の真骨頂を發揮して欲しい。間違いなく廃炉等の後始末技術は国内外で優れたビジネスになるだろう。私達の時代は都合のいい技術を目先の利益だけを考え、利用して来た事は謙虚に反省しなければならない。

今私達にできることは原発事故後の見たまま感じたままを周りの人に伝えること。一方で原発事故=福島全域ではないことも伝えなければならない。風評は何時の時代でも怖いもの、真実を曲げ大切な人間の繋がりを壊すから。

(文責写真: 今井)